



「母」の成り立ち

美しいメロディーとともに世界中で愛され、多くの人に歌われている「母」。

「母」は1976年（昭和51年）8月5日、婦人部の研修会の席上、池田名誉会長から発表された。

この歌は、同研修会からさかのぼること5年、71年（昭和46年）10月4日に開催された関西婦人部幹部会で発表された名誉会長の長編詩「母」をもとに山本伸一の名で作詞された。

この歌詞に、音楽大学出身の松本真理子さん、松原真美さんが曲をつけた。

作曲者の松本さん、松原さんに名誉会長はひとつだけ注文をした。それは、故郷の青春の思い出を歌った「森ヶ崎海岸」のような感じの曲に——ということであった。

松本さん、松原さんには、作曲の経験はほとんどなかったという。しかし二人は、師の思いに応えるべく真剣に作曲に取り組み、「母」は、流麗な旋律で、詩情豊かな歌として完成した。

「母」は、婦人部結成25周年にあたる76年（昭和51年）の秋には、各方面で開催された25周年祝賀会で歌われ、婦人部の愛唱歌として全国に広がっていった。

「音楽は世界共通の言葉である。文化や民族の違いを超えて理解しあえる。そこには平和がある。そして“母”には、人はみな格別の思いがある。ゆえに、私はこの『母』の曲を、世界の全ての母たちに捧げる——」

この名誉会長の言葉通り、「母」は翼をもったように国を超え、文化の違いを超え、世界中の多くの人々に愛されている。

名誉会長は、「母」の歌に託した思いを語っている。

「長編詩『母』を歌にと考えたのも、けなげな庶民の母たちが、世界の人々の幸せと平和を祈り、日夜、献身的に行動しておられることへの感謝の思いからである」——と。

この曲が完成したのは、名誉会長の母・一（いち）さんが亡くなる1か月前のことであった。戦中・戦後の苦難の時代を生き抜いた、快活で優しくあった母への思い、そして、草創期から広布の道なき道を切り開き、学会発展の礎を築いてきた幾百万の無名の母たちへの思いを託す賛歌として、「母」は美しい平安の調べを奏で、母のぬくもりと平和への思いを、地球に広げている。

